

# 幼稚園実習及び保育実習Ⅱによる保育学生の子どもイメージの変容

## Transformation of the image of the childcare student by student teaching in nursery school

次世代教育学部こども発達学科

古田 康生

FURUTA, Yasuo

Department of Child Development

Faculty of Education for Future Generations

新見公立短期大学

幼児教育学科

渡部 昌史

WATANABE, Masashi

Niimi College

Department of childhood Education

**キーワード：**意味微分法（SD法），子どもイメージ，保育実習Ⅱ

**Abstract：** In this study, it was intended that I examined transformation of the outlook on child of the childcare student by the SD method by associating with an infant in kindergarten training continually. As a result, the following results were obtained.

- (1) As for the outlook on individual child score mean of a childcare student surveyed in this study, as for the meaningful transformation, it was not admitted before and after kindergarten training.
- (2) Because it arrested a child by learning or the childcare training of various kinds of specialized subjects affirmatively that significant difference was not accepted in kindergarten training by an outlook on individual child score, it was thought that it influenced it that in front of training score was a high price.
- (3) Significant difference was accepted at the outlook on child score according to the question item by five items, and it was thought that it was reflected what I was concerned with a direct infant in kindergarten training.
- (4) The outlook on child score according to the question item showed the tendency that score width bi-directionally spread through of affirmation, the negation through kindergarten training, and outlook on child was realized more.
- (5) I cannot clarify what of the kindergarten training influenced the transformation of the outlook on child score according to individual treatment, the question item by the investigation into this study. Therefore I let you do the episode description by free descriptions and must investigate connection with the score transformation.

**Keyword：** Semantic differential method (SD method), children view, kindergarten teaching practice

### 1. はじめに

保育士や幼稚園教諭を養成する保育者養成課程で学ぶ学生（以下、保育学生とする）の子どもに対するイメージ（以下、子どもイメージ）を客観的に把握することは専門教科教育や保育所・幼稚園実習事前指導の指導内容を検討する上で有益な情報を得ると考えられる。これまでの子どもイメージに関する研究・調査は「子ども観には、それまでの子どもと関わる体験の有無とその内容、成育過程の影響を受け、その結果が

子どもへの関わり方・接し方、種々の問題解決への取り組み方と関連がある」（市江，1992）と報告されていることから、看護教育、特に小児看護の分野で子どもイメージ尺度や対児感情尺度を用いて数多くの報告がある。看護、小児看護に関する専門教育による子どもイメージの変容、保育所や幼稚園での健常児を対象とした実習、小児病棟等での病児を対象とした臨床実習を通しての子どもイメージの変容、看護学生とそれ以外の分野を専攻する学生との比較などがなされている。その多くの研究が子どもイメージの調査尺度が意

味微分法 (Semantic differential Method, 以下SD法とする) あり, 井上ら (1985) により報告された「子ども観」が客観的に把握できる51の形容詞対が多用されている。この方法は「明るいー暗い」「やわらかいーかたい」など51組の形容詞対に多段階 (本研究では7段階) から調査対象者が該当するイメージを回答させ, その値を得点化する。

本研究の調査対象となったA大学は, 四年制保育者養成課程であり, 2年時に保育実習ⅠB (施設) と保育実習ⅠA (保育所), 3年時に幼稚園教育実習と保育実習ⅡまたはⅢを履修する。そこで, A大学の3年次学生を対象に幼稚園教育実習前および後に子どもイメージを調査し, その変容を検討した (古田, 1013)。幼稚園実習前, 女子学生に比べ男子学生の実習前の得点が低かったが実習後は男子学生の方が高値を示し, 上昇幅が大きかった。また, 調査対象となった保育学生の多くは, 幼稚園実習後においてイメージ得点が下降せず, 維持または上昇していた。しかし, 幼稚園実習では3歳以上児を対象として主に教育により子どもとの関わりをしたが, 保育所実習では, 0歳児の乳児から3歳までの未満児を含め養護と教育を通して子どもと関わることとなり, 実習内容が異なる。そのため, 保育学生は保育実習後において幼稚園実習後とは異なる子どもに対するイメージが形成されるのではないかと予測される。

そこで, 本研究では, 幼稚園実習に引き続き保育実習Ⅱ事前指導及び保育実習Ⅱによる子どもイメージがどのように変容するかをSD法により検討することを目的とした。

## 2. 研究方法

### (1) 調査対象者

対象者は, 岡山県A大学の保育士・幼稚園教諭養成課程3年次に在籍する保育・幼児教育専攻学生42人 (男子学生13人, 女子学生29人) とした。

なお, 本研究の対象学生となった保育学生は3年次学生であり, 既に2年次に保育実習ⅠB (施設) と保育実習ⅠA (保育所), 3年次前期に幼稚園実習を履修した学生であった。

### (2) 幼稚園実習内容

1) 実習期間: 平成26年2月の10日間

2) 実習内容: 指導実習 (半日実習及び全日実習を含む)

### (3) 調査方法

- 1) 調査は, 保育実習Ⅱ事前指導の初日である平成25年9月に1回目調査を実施し, 対象学生の全員が実習を終了した平成26年2月に実習後の2回目の調査を実施した。調査は, 質問用紙を配布した後に回答方法の説明を行い, 回答終了後にその場で直ちに回収した。

#### 子どもイメージ調査の流れ

幼稚園実習前調査Ⅰ (平成25年8月) →幼稚園実習 (9~10月) →幼稚園実習後調査Ⅱ (平成25年9月) →保育実習Ⅱ事前事後指導 (15週間) →保育実習Ⅱ →保育実習後調査Ⅲ (保育実習Ⅱ事後指導にて実施)

- 2) 質問項目: 市川ら (2009) や細野ら (2009) が看護学生の子どもの観を調査した方法を用いた。つまり, 井上ら (1985) が子どもの観の測定に有効とした51組の形容詞対を用い, それぞれの形容詞対の質問項目に対して, 7段階の評価尺度から選択させる方法である。「明るいー暗い」などの51組の形容詞対の質問項目について最も肯定的イメージであれば7点, 最も否定的イメージであれば1点と選択させた。

### 3) 分析方法

調査対象者となった保育学生の個々から得られた51組の形容詞対ごとの総得点平均値である子どもイメージ得点 (以下, 子どもイメージ得点とする) と51組の形容詞対の質問項目ごとの平均値 (以下, 質問項目別得点とする) をそれぞれ集計し, 平均値及び標準偏差で表して分析の対象とした。

### 4) 倫理的配慮

調査を開始するにあたり, 本研究の手順と主旨を口頭及び文書にて説明した。特に, 回答の義務と個人情報に関しては, 回答は義務でない, 回答は途中でであっても中止できる, 回答しないことによる不利益はない, 回答による個人情報は守られ, 研究成果として公表するにあたり個人が特定されることはない, と説明した。その後, 同意が得られた対象者のみ質問紙に回答を記入した。

### (4) 統計処理

質問紙調査により子どもイメージ得点と質問項目別得点の平均値と標準偏差を得た後, 保育学生の保育実習Ⅱの前後で得点平均値に差が認められるか是对応のあるt検定を用いて検討した。統計処理にはエクセル

統計2000を用いた。

3. 結果と考察

本研究は、SD法を用いて保育学生の子どもに対するイメージが幼稚園実習（20日間）と保育実習（10日間）によりどのように変容するか把握し、その結果を保育と幼児教育の専門教科教育に役立てることを目的に実施した。

1. 幼稚園実習・保育実習Ⅱの前・後の子どもイメージパターンの変容

図1は、幼稚園実習前、幼稚園実習後（保育実習Ⅱ前）及び保育実習Ⅱ後の子どもイメージ得点のパターンである。幼稚園実習と保育実習Ⅱの前後では同様なパターンの傾向を示し、幼稚園実習の前と後、及び保育実習後に質問項目得点に統計的な有意差は認められなかった。つまり、2つの実習の前後で保育学生の子どもイメージは同様なパターンを示し、特に得点の上昇と下降が認められる質問項目は見られなかったといえる。保育実習と幼稚園実習ではいくつかの差異がある。つまり、実習での対象児では保育実習では0歳児から6歳児までを対象とするのに対して、幼稚園実習では3歳以上を対象とする。また、実習の目的では幼稚園実習では教育に重点が置かれ、教諭の援助を

学ぶのに対して、保育実習では養護と教育における保育士の配慮を実践的に学ぶ。そして実習期間では保育実習がⅠA（保育所）とⅠB（施設）でそれぞれ10日間の計20日間と保育実習Ⅱで10日間となっているのに対して、幼稚園では連続して20日間となっている。しかし、これらの違いがあるにもかかわらず本研究では子どもイメージ得点に有意差は認められず、高値を維持していた。保育園や幼稚園での実習により子どもイメージ得点が増したとの報告もあるが、本研究では有意な上昇は認められなかった。その理由として、実習前の段階で子どもイメージ得点が既に高いレベルにあったためと考えられる。

2. 子どもイメージ得点平均値の変容

保育学生の幼稚園実習前・後および保育実習後のSD法による子どもイメージ得点を表1に示した。保育学生の幼稚園実習前得点（ $5.38 \pm 1.50$ ）と幼稚園実習後得点（ $5.47 \pm 1.38$ ）、保育実習後得点（ $5.47 \pm 1.38$ ）には統計的な有意差は認められなかった。

これまでの1年から3年次2月までの専門教科教育および保育実習ⅠA（保育所）と保育実習ⅠB（施設）及び幼稚園教育実習により子どもイメージが肯定的になっていたため保育実習Ⅱ後で子どもイメージ得点に有意差が認められなかったと考えられる。

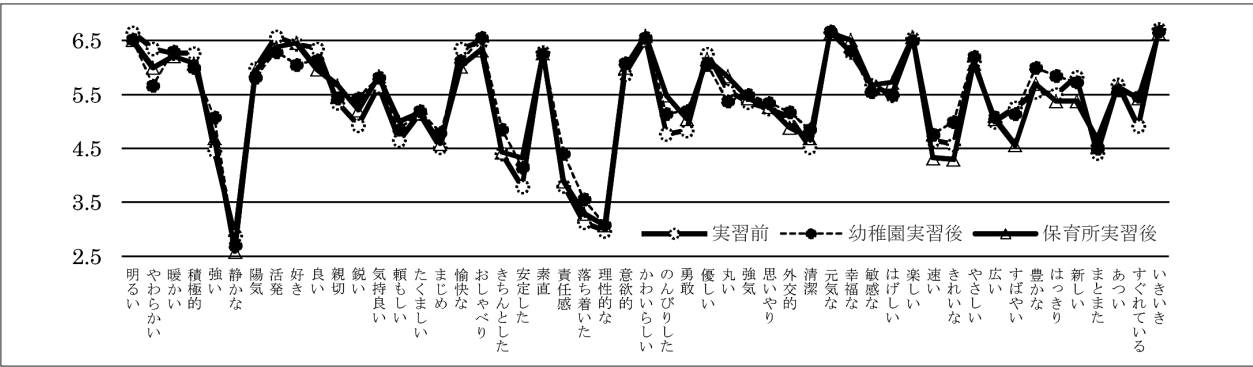


図1 幼稚園・保育園実習前後のSD得点パターンタイトル

表1 幼稚園・保育所実習後の子どもイメージ得点の変容

|       |      | 実習前   | 幼稚園実習後 | 保育実習後 | 有意差  |
|-------|------|-------|--------|-------|------|
| 全保育学生 | mean | 5.39  | 5.47   | 5.41  |      |
| n=42  | SD   | ±1.53 | ±1.39  | ±1.51 | n.s. |
| 男子学生  | mean | 5.29  | 5.51   | 5.24  |      |
| n=13  | SD   | ±1.58 | ±1.33  | ±1.53 | n.s. |
| 女子学生  | mean | 5.42  | 5.48   | 5.45  |      |
| n=29  | SD   | ±1.50 | ±1.43  | ±1.50 | n.s. |

#### 4. まとめと今後の課題

本研究では、幼稚園実習に続けて保育実習Ⅱにて幼児と関わることで保育学生の子どもイメージの変容をSD法により検討することを目的とした。その結果、次のことが明らかとなった。

- (1) 本研究で調査対象となった保育学生の子どもイメージ得点平均値は保育実習Ⅱの前後で有意な変容は認められなかった。
- (2) 有意差が認められなかったのは3年間の専門教科の学習や保育実習と幼稚園実習などにより子どもを肯定的に捉えているため、実習前得点がすでに高値であったためと考えられる。

#### 5. 付記

本研究は、平成26年度環太平洋大学学内特別研究費の助成を受けて行われた。また、本研究の一部は、日本保育士養成協議会 第53回研究大会にて発表した。

#### 6. 参考文献・引用文献

- 井上正明，小林利宜，日本におけるSD法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概観，教育心理学研究33：253-260（1985）
- 細野恵子，市川正人，上野美代子，看護系学生と非看護系学生および保育系学生の乳幼児に対するイメージの比較，名寄市立大学紀要3：79-86（2009）
- 市江和子，看護学において看護学生が子ども対してもつイメージの変化－小児看護学学習前後におけるイメージ形成要因－，第28回日本看護学会集録（看護教育），140-142（1992）
- 市川正人，細野恵子，上野美代子，看護学と他学科学学生乳幼児に対するイメージの比較，名寄市立大学紀要3：87-93（2009）
- 市川正人，細野恵子，看護系大学生のもつ乳幼児に関するイメージの変化（第1報）－小児看護領域学習前後の比較による学習効果の検討－，名寄市立大学紀要5：21-26（2011）